

日本認知心理学会における大会発表の研究動向

——アブストラクトに基づく分析——



○井関 龍太
(大正大学人間学部)

問 題

【日本認知心理学会の歩み】

- ・2003年:設立
- ・2024年:第22回大会を開催

※日本の関連学会の中でも**後発**

- ・日本認知科学会(1983年)
- ・日本基礎心理学会(1981年)
- ・日本発達心理学会(1989年)
- ・日本感情心理学会(1992年)

→伝統の継承というよりは、**ここ四半世紀の認知心理学の研究動向**を反映する見込み

【本研究の目的】

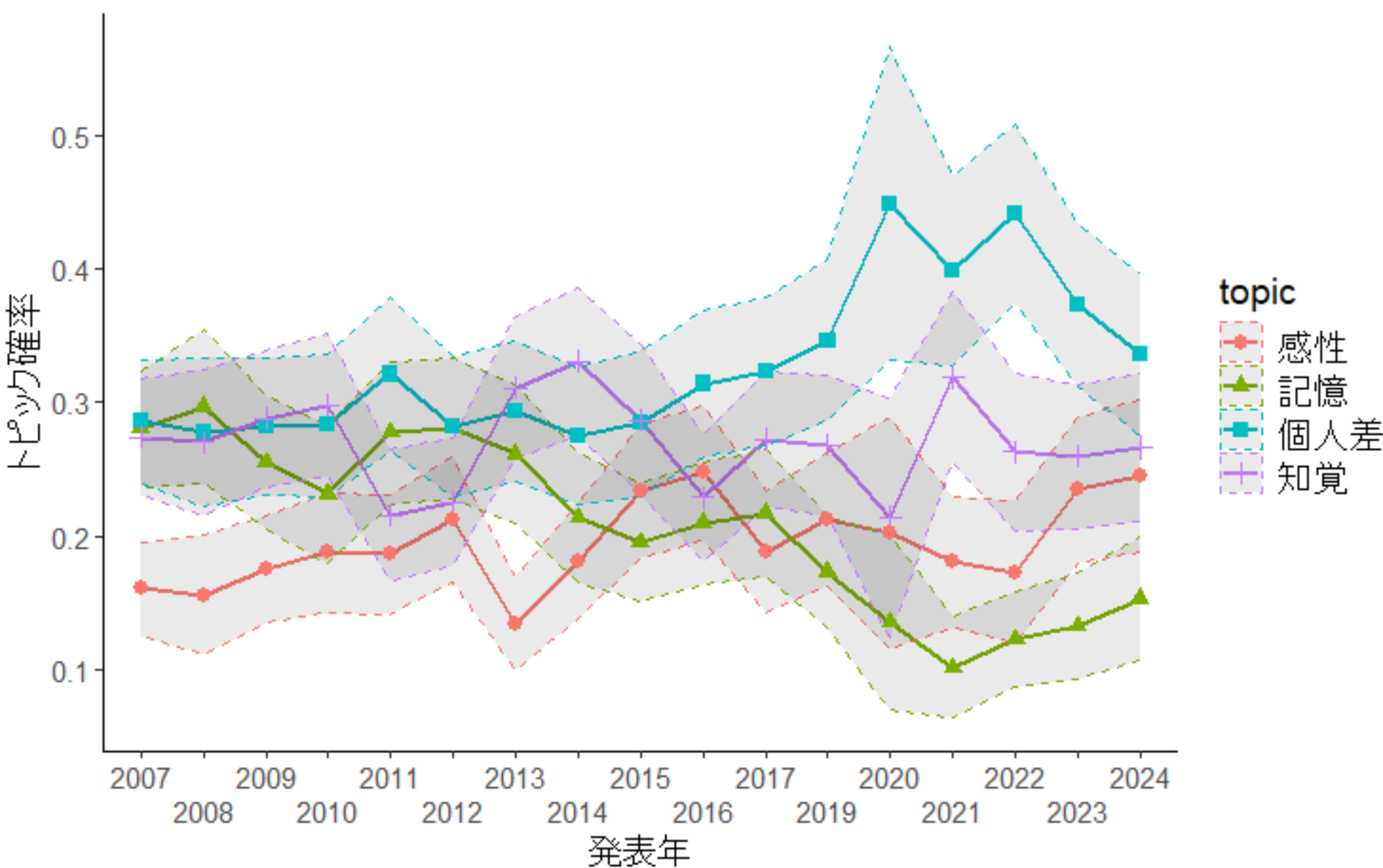
- ・認知心理学会大会の**アブストラクト**に基づいて、ここ20年程の**研究動向の推移**を検討
- アブストラクトに基づく**トピックモデリング**:
 題目やキーワードではなく、発表者が研究のどのような側面を強調しているかに着目
 (研究者の研究に対する目線を反映)

方 法

- 材料**:J-STAGEに登録された**日本認知心理学会大会の発表論文集**におけるアブストラクトのデータをRのjstagerパッケージ(Nishimura, 2024)を用いて収集
- アブストラクト情報の登録がない第16回大会(2018年)は含まない
 - 第18回大会(2021年)は英文データが混在するため、英文部分を除外
- 分析**:自然言語処理ライブラリGiNZA(松田他, 2019)を用いて形態素解析を実行(ja_ginza 5.2.0, モードC, SudachiDict-full 20250129)
- **普通名詞**と**一般名詞**を抽出(GiNZA既定のストップワードは除外)
 - 出現頻度500以上の語についてジャカード係数を算出
 - ウォード法によるクラスター分析:特定のテーマに関わらず用いられる**一般的な用語**を特定・除外
 - 出現頻度60より大の語について潜在ディリクレ配分法(LDA)

結果と考察

Figure 1
発表年ごとのトピックの推移(帯は95%信頼区間)



【ここ10年ほどで目立つ変化】

- ・**記憶**を重点的なテーマとしてアピールする研究の減少
- ・**個人差**に焦点を当てて記述する研究の増加
→基礎研究から応用研究へのシフト?

Table 1
各トピックに特徴的な語(上位10語)

記憶	個人差	知覚	感性
記憶	群	刺激	顔
学習	記憶	視覚	画像
単語	名	運動	刺激
情報	認知	注意	感情
再認	傾向	身体	度
項目	行動	反応	表情
語	対象	時間	印象
再生	高齢者	知覚	評価
処理	特性	情報	評定
テスト	者	感覚	性

【テーマによらず用いられる語】

- ・影響, 結果, 研究, 効果など

【4つのトピック】

- ・**記憶**:単語などの再生・再認
- ・**個人差**:年齢や特性による違いに関心
- ・**知覚**:感覚, 知覚, 注意, 運動など
- ・**感性**:顔や画像などの印象や評価

Figure 2
クラスター分析の結果

